



http://www.apu.ac.jp

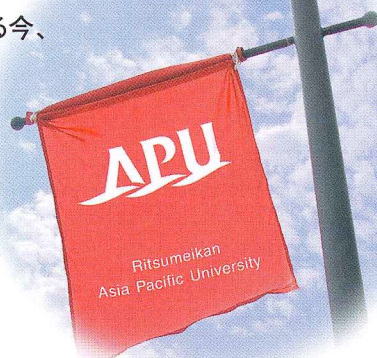
Ritsumeikan  
Asia Pacific  
University

February 2006

発行／立命館アジア太平洋大学 アドミッション・オフィス  
〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1 Tel.0977-78-1120 Fax.0977-78-1121  
E-mail ml-apuinfo@ml.apu.ac.jp

# アジア太平洋時代のリーダーをめざし 世界基準の教育を求める世界の“excellence”が集う

世界の名門大学が優秀な学生の確保を求め“国境なき学生争奪戦”を繰り広げる今、日本の高等教育も大きな転換期にさしかかっている。  
基本理念に「アジア太平洋の未来創造」を掲げ、2000年4月に開学したAPUは、このような状況下、国内外の政財界の支援と期待を背に開学6年目を迎えた。  
今や70を超える世界の国・地域から、それらを代表するような優秀な学生が集い、国内外の学術界および政財官からの要人も数多く本学を訪れている。  
日英二言語教育をはじめとする先進的な教育システムを導入したAPUは、増大化かつ複雑化するアジア太平洋地域の困難な課題解決に挑戦し、未来を創造するリーダーを育成する。



## 日本人の英語力はアジア最下位レベル!?

厳しい現実を示すデータがある。英語を母語としない人々の英語能力を測るTOEFL®の日本人平均スコアは520点。アジア主要諸国・地域における12位・北朝鮮とは3点しか差がないのである（下表参照）。その一方、「企業の多くが就職の際にTOEFL®やTOEIC®のスコア提出を求める」ことが少なくない韓国や中国とは30点ものひらきがある。

このようなスコア差はなぜ生じたのか。原因は多々あるものの、「日本の大学における英語教育」が問われる状況にあるのも事実だろう。

かたや世界の一流大学では、「英語“を”学ぶ」どころか、一般科目から専門科目まで「英語“で”学ぶ」ことが常識となっている。ところが日本の大学の外国人教員比率は「平均3.5%」という調査結果もあるのが現状である。

また、国際競争社会を生き抜く人材となるには、英語力に加えて、異文化理解をふまえたコミュニケーションやネゴシエーションの能力も不可欠である。

では、優秀な留学生に伍して英語“で”教育が受けられるなど、国際競争社会を生き抜く能力を得るための環境を整えることが、日本の高等教育における共通の課題となっている。その現実を決して、大学の偏差値ランキングなどからは見えてこないであろう。

アジア主要諸国・地域のTOEFL®平均スコア			
順位	国・地域	PBT	(CBT)
1	インド	592	(247)
2	パキスタン	582	(235)
3	フィリピン	578	(234)
4	ネパール	561	(222)
5	香港	552	(216)
6	インドネシア	551	(214)
7	中国	550	(213)
7	韓国	550	(213)
9	台湾	537	(203)
10	タイ	534	(201)
11	日本	520	(190)
12	北朝鮮	517	(187)

※対象は受験者3,000人以上の国・地域。

※TOEFL®とは「Test of English as a Foreign Language」の略であり、英語を母語としない人々の英語能力を測る試験。通常、欧米の大学へ進学するには、500～550点が求められる。

※表記「PBT」と「CBT」について／従来のペーパー試験によるものが「PBT」スコア。コンピュータ試験によるものが「CBT」スコア。両スコアは相互換算できる。

## 英語を“教育言語”としたAPU

現在、アジアの各国・地域では、国際社会に対応できる人材の育成をめざし、英語“で”教育を行う中学校や高校が数多く設置されており、優秀な生徒を集めることにも成功している。こうして英語で教育を受けた高校生は従来の自国の大学に加え、世界中から大学を選択することが可能となり、選択の幅・成長の可能性は飛躍的に拡大している。世界中の主要大学では、英語によって教育を行うことは「常識」となりつつある。

APUは日本の大学として「日英二言語教育」を基本コンセプトとするはじめての大学である。APUの留学生は80%以上が「英語基準」で入学することからも明らかのように、APUの開学は、世界中の優秀な留学志望層に日本留学という選択肢を与え、その結果今や70以上の国・地域から約1,900名の国際学生が集まるに至っている（日英二言語教育の詳細については次ページ参照）。

学生総数に占める留学生比率で比較すると日本の大学で“断トツ”トップである。その要因は、「日本で学びたい」という世界中の優秀かつ意欲に溢れた若者たちにとって、最大の障壁となっていた日本語の壁が「日英二言語教育」制度等によって解決したことにあるのだが、彼等がその国・地域を代表するレベルの優秀な学生であることは、APUが開学以来めざしてきた“成功”のひとつといえよう。

そのような国際学生（APUへの留学生）たちの優秀さはTOEFL®スコアの高さにもあらわれている（下表参照）。

彼等の多くは出身国・地域の一流進学校に学んでおり、地元の国立大や難関大を“蹴って”APUを選んだ者も少なくない。その中には、政府系官僚養成機関からの派遣学生や国費留学生も多数含まれる。当然ながら彼等の学力や学修意欲は極めて高く、アジア太平洋地域が抱える諸問題の解決に取り組む、APUならではの学問を日々アカデミックに行っている。

その成果は彼等の“就職”においても示される。一般的に「留学生の日本企業への就職は極めて困難」といわれているが、これを希望するAPUの国際学生たちは、ほぼ100%の確率で内定を勝ち取り、毎年100名以上が大手一流企業に入社していくのだ。

このように優秀な国際学生たちが、日本人学生たちに与える影響も計り知れないほど大きい。日常的な交流による英語等言語力の向上はもとより、異文化対応型コミュニケーション能力が、日々高度に培われていくのだ。ここに学ぶ、世界中の多様な言語や文化背景を持つ優秀な学生たち。彼等“excellence”が、アジア太平洋の未来を創造する日は決して、遠い明日ではないだろう。

APU留学生のTOEFL®スコア	
国・地域	平均スコア
ベトナム	582
ネパール	579
韓国	578
台湾	566
中国	556
モンゴル	552
インドネシア	551
バングラデシュ	550
タイ	523

※2002年以降の入学者でスコアを提出した者の出願時の平均値。

## アジア太平洋の未来を創造するリーダーが学ぶAPU

卒業生を含めた、APU学生たちの出身地はアジアに限らず、南北アメリカから欧州、アフリカに至る80カ国・地域に達しようとしている。同時に、各国・地域の“excellence”である彼等が出身地の政財界や学界、国際社会において築くであろう人的ネットワークが、APUをさらに発展させる原動力となることも確かだ。

また、このように各国・地域の政財界や学界のリーダーに嘱望されている留学生たちに触発され、「自分の進むべき道を見つけた」と述べる日本人学生も多く見かける。彼等はAPUを「夢や志を見つけ、さまざまな壁をブレイクスルーする“主体性”というチカラが身につく大学である」とも言う。

日本の従来の常識を大きく覆す「多文化・多言語」環境にあるAPU。世界を常に身近に感じ、世界基準の学びを選んだ留学生たちと議論し、新しい思考や価値観を見つける毎日から、アジア太平洋の未来を創造するリーダーを育成するAPU。激化する国際競争を視野に入れ、世界基準の教育を求める世界の“excellence”が集う国際大学として、私たちAPUは、その責任を全うする。



# APUが取り組む「日英二言語教育」と「新・教学体系の導入」

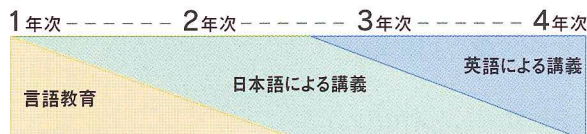
## アジア太平洋の未来創造に挑むリーダー育成へ

世界中の優秀な留学生在日本で学ぶことを可能にした「日英二言語教育」をはじめ、APUでは様々な世界標準の教育システムを導入している。増大かつ複雑化するアジア太平洋地域における諸課題に対応し、2006年度よりAPUは新たな教育・研究組織の改革に着手する。

### 日英二言語教育

英語“を”学ぶのではなく「英語“で”学ぶ」ことを目標に、APUでは多くの日本人学生が履修の中心を「英語による講義」へとシフトしていく。

APUにおける教育の根幹、そのひとつは、ほとんどの授業が日本語と英語の双方で開講されていることにある。これをベースに、日本語基準で入学した国内学生（多くは日本人学生）も卓越した言語教育を受けながら英語力を1・2回生の間に向上、3・4回生次には英語で開講される専門科目が履修できるレベルへの到達をめざしている。



また、専門科目と言語教育科目を連動して学ぶ「付接モデル」を用意して

いるのもAPUの特徴。これは専門科目に準じた内容の講義を英語で受けながら、英語力の向上をめざすというもの。本格的な英語による専門科目の履修に備え、英語によるディスカッションやライティングなどの力を身につけ、スムーズな接続を行っている。

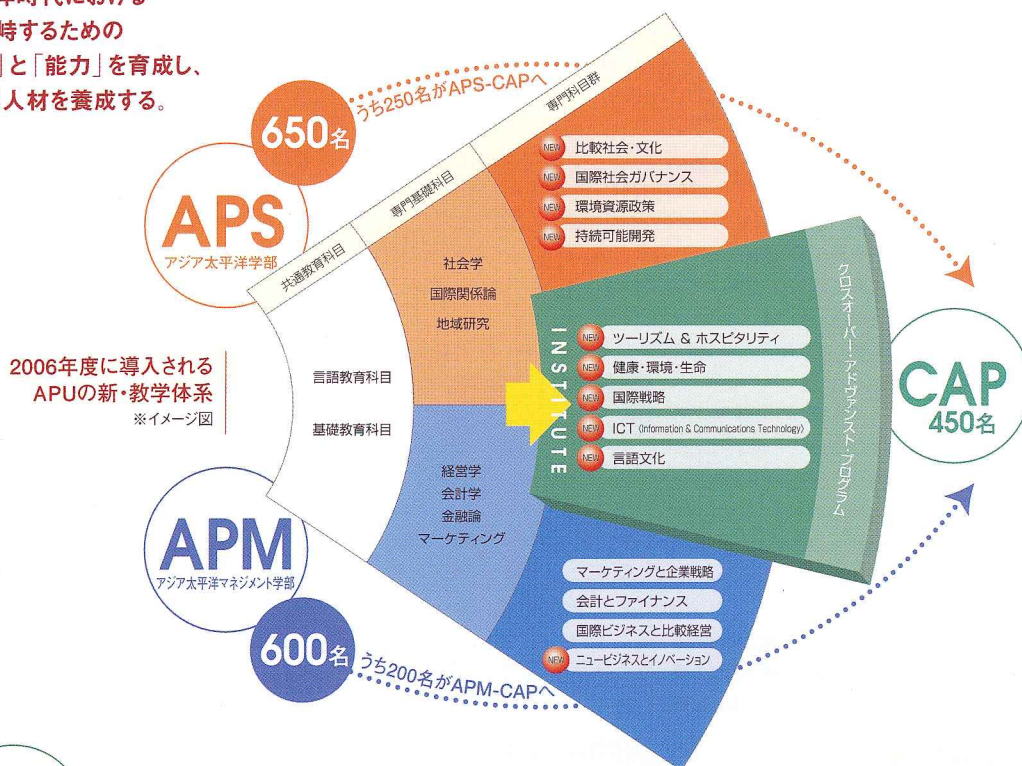
これらにより、APUでは「英語が話せる」ではなく「英語“で”学べる」までの英語運用能力を4年間で身につけ、国際社会での活躍へとつなげている。

★2003年度にはこれら「多言語環境における日英二言語教育システム」が、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択された。



### 新・教学体系

アジア太平洋時代における諸課題と対峙するための「専門知識」と「能力」を育成し、リーダーたる人材を養成する。



2006年度に導入される  
APUの新・教学体系  
※イメージ図

**CAP**  
Crossover Advanced Program

**APS**  
College of Asia Pacific Studies  
アジア太平洋学部

**APM**  
College of Asia Pacific Management  
アジア太平洋マネジメント学部

APSとAPMの専門領域を融合・発展させることにより、アジア太平洋地域の重要課題に挑む5つのプログラムを展開。学べる領域がさらに拡大。

学生はAPS（アジア太平洋学部）もしくはAPM（アジア太平洋マネジメント学部）に所属しつつ、専門領域の学修については2学部の領域を横断（クロスオーバー）し、大学院（修士・博士課程）への接続も視野に入れた教育課程、CAP（クロスオーバー・アドヴァンスト・プログラム）で学ぶ。

自由で平和な地球社会の実現をめざす次代のリーダーへ、豊かな「構想力」と高度な「実践力」を身につける。

文化的、社会的に多様性を有しながらも、急速に相互依存性を高めているアジア太平洋地域。しかし、安全保障、民族・宗教、環境問題など、課題はますます複雑化し、深刻化しているのが現状。どのようにして、この地域に秩序を形成し、持続可能な社会を築き上げていくのか。これら諸課題の解決策を探り、アジア太平洋地域が進むべき道を目指すのが、APS（アジア太平洋学部）。

このAPSでは、社会学・国際関係論・地域研究を軸にして、「比較社会・文化」「国際社会ガバナンス」「環境資源政策」「持続可能開発」の4分野について学修。同時に様々なフィールドワークなど、キャンパス外での多彩な学修プログラムを通じて問題意識を育み、豊かな構想力と高度な実践力を身につける。

戦略的な思考力と豊かな国際感覚を備えたビジネスリーダーへ、確かな「決断力」と「行動力」を身につける。

スピーディーに、ダイナミックに、発展を遂げるアジア太平洋地域。この地域のビジネス社会に、新たな価値を創造するリーダーの育成がAPM（アジア太平洋マネジメント学部）の目標。

経営学を中心にマネジメントの基本概念を修得した上で、「マーケティングと企業戦略」「会計とファイナンス」「国際ビジネスと比較経営」「ニュービジネスとイノベーション」という4つの分野について体系的に学修。国際ビジネスの最前線で求められる論理的思考力と戦略的マインドを身につける。さらにAPMでは、ビジネスの現場を実体験するインターンシップを積極的に展開。これにより、知識だけでなく実践力も身につけていく。



# 授業のすべてが英語で行われるAPU大学院 院生の90%以上は海外からの入学者であり 形成される“国際人脈”が次代の世界をリードする

ApU press

special column ①

2003年に開設されたAPU大学院は、国際化が進む21世紀のグローバル・リーダー養成を使命とし、授業のすべてを英語で行っている。これを受けて現在、院生の90%以上が海外からの入学者となっている。

そのようなAPU大学院は「アジア太平洋研究科」と「経営管理研究科」、二つの研究科を設置している。

「アジア太平洋研究科」では、この地域が抱える問題の解決策や、様々な変化・発展を政策的かつ戦略的に研究し、そのトップリーダーとなり得る研究者の輩出をめざした「アジア太平洋学専攻」を設置している。および国際協力に必要な専門性を備え、具体的な政策立案に携わることのできる高度専門職業人を育成する「国際協力政策専攻」も設置している。

「経営管理研究科」では、MBAの本流である欧米式マネジメント手法を身につけると同時に、日本やアジア太平洋地域のケース・スタディに特化したAPU独自のMBAプログラムを提供している。

APU大学院に学ぶ院生の約30%は何らかの公的な奨学金を得ており、その多くが日本のODAや海外政府機関、企業などから派遣された次代のトップリーダー候補生である。

また「Asia Week」誌等による世界の大学ランキング“トップ100”に入る大学出身の院生も多く、APU大学院において、次代の世界をリードする独自の“国際人脈”を形成することも可能となっている。

## <APU大学院生の主な出身大学>

- 日本／東京大学1名・京都大学1名・横浜国立大学1名・早稲田大学2名  
中央大学1名・政策研究大学院大学2名・他
- 海外／サセックス大学(英国)1名・ワシントン大学(米国)2名・ミシガン州立大学(米国)2名  
トロント大学(カナダ)2名・アデレード大学(オーストラリア)1名  
オークランド大学(ニュージーランド)1名・マラヤ大学(マレーシア)2名  
シンガポール国立大学1名・チュラロンコン大学(タイ)4名  
北京大学(中国)1名・香港大学1名・台湾大学2名・他

※記載の海外大学は「Asia Week」誌等による世界の大学ランキング“トップ100”に入る大学。

## <APU大学院の構成>

	課 程	専 攻	分 野
アジア太平洋研究科 (GSA)	博士前期課程 (1年での修了が可能)	アジア太平洋学専攻 (APS)	アジア太平洋学
		国際協力政策専攻 (ICP)	開発経済 国際行政 環境管理 観光管理
	博士後期課程 (2年での修了が可能)	アジア太平洋学専攻 (APS)	アジア太平洋学
経営管理研究科 (GSM)	修士課程 (1.5年での修了が可能)	経営管理専攻 (MBA)	ファイナンス 国際ビジネスとマーケティング イノベーションと技術経営 (MOT)

●お問い合わせはAPUアドミッションズ・オフィス(大学院担当)まで  
Tel.0977-78-1119 Fax.0977-78-1121 E-mail apugrad@apu.ac.jp

special column ②

## 世界のビジネスフィールドへ 就職内定率「98.2%」を達成!!

※就職を希望した2004年度卒業生の数値(2005年3月31日統計)

この就職内定率「98.2%」は、新設文系大学として注目を集めるにふさわしい数値である。一般的には厳しいとされる留学生や女子学生もこれ以上の内定率を示しており、APUが育む人材が経済・産業界の今のニーズにいかにか合致したものであるか、これらの数値はその証しといえるだろう。

## 「オンキャンパス・リクルーティング」へ APUに来られる企業が約250社にまで急増!!

APUでは、就職活動サポートの大きな柱として「オンキャンパス・リクルーティング」を実施している。これは企業の方々が来学され、APUの学生を対象として、会社説明会や筆記試験・面接といった一連の採用活動をキャンパスにおいて行われるもの。

このようなことが実施できるのも「APUは人材の宝庫」という評価をいただいているからこそ。2005年度に来学された企業数は約250社にまで急増した(2003年度は約80社)。



special column ③

## ノーベル経済学賞受賞者アマルティア・セン博士をはじめ 世界の叡知や政財官の要人などのVIPが続々と来学!!

国費留学生をはじめ、各国・地域における次代のリーダー候補生が学ぶAPU。そのような、世界の“excellence”に対してAPUはどのような環境や教学体系を整備し、いかなる教育を展開しているのか。これらを教育政策の参考として知るべく、世界各国・地域の大使や総領事、財界トップなどのVIPが、2005年度も視察や意見交換に続々と来学された。

また、世界の平和や経済に発展と安定をもたらすためのアジア太平洋学を創造・推進するAPUには“世界の叡知”と称される研究者からの賛同や提言も常に多く集まってくる。

これを受け、10月には立命館アジア太平洋研究センター(RCAPS)が招聘、来学されたノーベル経済学賞受賞者であるアマルティア・セン博士(ハーバード大学教授)が、国際シンポジウムにおいて特別講演を行われた。11月には「2005世界観光学生サミット」の来賓として、小泉純一郎首相も来学されている。

### 2005年度の主なAPU来学者(抜粋)

- 4月 ●経団連・和田事務総長 ●モンゴル国外務省アジア局長  
●台湾高校修学旅行一行 ●在大阪インド総領事  
●タイ・バンコク都事務次官 ●日産自動車・高橋副社長
- 5月 ●フランス大使 ●台湾教育部国際交流視察団 ●ロシア連邦大使
- 6月 ●在福岡アメリカ領事館首席領事 ●アデコ・マークデュレイ会長  
●ジンバブエ共和国大使
- 7月 ●チェコ共和国・商務担当参事官
- 8月 ●内閣官房都市再生本部事務局・赤松企画官
- 9月 ●タイ工業連盟会長
- 10月 ●外務省・小原総領事 ●中国雲南省訪問団 ●中国商務省関係者  
●アマルティア・セン博士(ノーベル経済学賞受賞)ハーバード大学教授
- 11月 ●小泉総理大臣 ●二階経済産業大臣 ●EU各国大使館関係者  
●明石元国連事務次長 ●ONG Keng Yong・ASEAN事務総長  
●中国雲南省地域開発人材育成研修団
- 12月 ●台湾教育部副大臣 ●パラオ共和国大統領 ●北側国土交通大臣





●工藤高史さん／日本経団連 国際協力本部  
本部長／2005年4月にご子息がAPUに入学。  
「APU-Club・国内学生父母の会」会長も務める。

## APUは日本の教育のパイオニア。 保護者として、経済人として、 大きな期待を寄せています。

グローバル化が急速に進む今日、日本がいかに世界の平和と繁栄に貢献していくか、ということがとても大きな課題です。地球規模の問題である環境・飢餓・エイズ・地域紛争・経済開発など、取り組まねばならない問題も山積しています。こういった問題に対する経済大国日本への期待は並々ならぬものがある。にもかかわらず、日本はこうした期待に対して必ずしも積極的なメッセージを発してこなかった。私はその根本原因に、日本人の性格や言語の障壁の問題があるのではないかと思います。しかしこれでは日本は世界の期待に応えられず、国家としての日本のプレゼンスが低くなりかねない。

ではどうしたらいいのか。やはり人材の育成、教育というものが重要だと私は思います。日本の社会は、大学を卒業するまでは国際社会と関わりのない純粋培養です。国内だけで一所懸命に頑張れば、ある程度の夢が実現できる社会だった。しかしこれでは井の中の蛙しか育たない。グローバル化が進展する中で、このままではいけないと思います。

学生時代から国際人としての教育を受け、国籍を超えたコミュニケーション能力を得ることが求められるようになるのではないかと。世界の約70カ国・地域から学生が集まるAPUはいわばミニ国連。日本が世界にメッセージを発し、貢献していくための大きなパイオニア的存在であると思います。学生という一番重要な時期に、国籍も、人種も、宗教も、文化も、いろいろな違いを理解し、コミュニケーションをはかることができるというのは、とても貴重なことです。

私の息子もAPUに在籍しているのですが、保護者としては、息子にも大学にもこれからの飛躍を期待しています。また経済人としては就職実績が極めて高いということに、企業や日本の社会がAPUにどれだけ大きな期待を寄せているかを感じます。

今後APUの卒業生が日本のみならず、アジアをはじめとする世界に活躍の場をひろげ、将来的には大きな人的ネットワークを地球規模で構築していくことを期待します。そして世界の平和と発展に貢献して欲しいと、心から願っています。

## 様々な国・地域から集まって来た 学生たちとの切磋琢磨から、 国際ビジネスという “めざす舞台に立つ資格”を 得ることができました。

アジアのリーダーと目される日本。その社会を学び、体感するためにAPUに入学しました。その頃の目標は日本を研究対象とした社会学者となり、タイで大学教授になることでした。でもAPUで様々な国・地域の人々や文化にふれ、よりワイドに、よりダイナミックに、アジア太平洋地域で活躍したいと思うようになり、私にビジネス志向が芽生えていきました。

そこでキャリア・オフィスのサポートを受け、就職活動をスタートさせました。国内市場のトップを争いつつ、国際事業をも最重要戦略としていたアサヒビールは第一志望。面接では「私がアサヒスーパードライを世界のNo.1ブランドにします」と明言。同時に、APUで培った「なにがあっても自分を信じてやり遂げる力」や「どのような壁であっても乗り越えようとする力」こそ、実力主義と成果主義を掲げる企業が求めるものではないかとアピールしました。

おかげで採用され、昨秋には志望していた国際事業本部・国際営業部に異動しました。それはまさに、私がAPUに学んで見つけたキャリアステージ。日本に限らず、様々な国・地域の学生たちとの切磋琢磨から、私は国際ビジネスという“めざす舞台に立つ資格”を得たのです。



●ワッタナコヴィント・ピチャヤさん／アサヒビール株式会社 国際事業本部 国際営業部勤務  
／2004年3月アジア太平洋学部卒業／タイ・バンコク出身



●竹本慎也さん／株式会社博報堂 第4アカウントユニット第21営業局勤務／2003年3月アジア太平洋マネジメント学部卒業／大阪府出身

## 「人とちがうことがしたい」という “反骨精神”が評価され、 AEと呼ばれる広告全般の プロデューサーに。

新設大学への興味と、卒業後は東京か大阪に勤務するだろうことから「別府に暮らすのも学生時代ならではの経験」と思ってAPUに入学。「人とちがうことがしたい」という生来の“反骨精神”が作用したのも事実です。

その精神は「大学を3年で卒業してやろう!!」という挑戦にもあらわれます。結果、僕はAPUを早期卒業するのですが、就職活動もかなり反骨的なものになりました。「新設大学を3年で卒業するヤツ」はかつてない存在だから“前例重視”が染みついた企業では評価対象外なわけです。ところが「そういうヤツこそ!!」と評価してくださる企業も結構あり、なかでも現勤務の博報堂はかなりの関心を示してくれました。

現在の仕事はAE（アカウント・エグゼクティブ）。営業とも呼べる職種ですが、広告全般のプロデューサーの立場に近く、専攻したブランドマーケティングの学びを活かしています。

また、APUの国際学生たちは常に「なぜ」と問いかけてくるから、それによって鍛えられた説明力も大いに役立っています。「大学での勉強や経験がどれほど仕事に役立つか」と社会はよく問いますが、APUに限っては「役立つ!!」と断言できますね。

## topics

### 「ツーリズムの未来へ\*」をテーマに 世界観光学生サミットを開催 \*副題～その原動力、持続可能な発展、既存の枠を超えて～

昨秋11月、APUと大分県、別府市の共同主催による「2005世界観光学生サミット」が行われ、世界21カ国・地域の78大学から461名の学生が参加した。

プログラムのスタートは九州各地の観光視察を行う「九州観光・交流キャラバン」。観光に関する9テーマに基づく、学生ならではの活気溢れる論議が3日間に渡って展開された。

それらの論議を総括、世界に発信する全体会には小泉純一郎首相も臨席。学生実行委員会・委員長の横本喜久美さん（APS4期生）の閉会宣言により、「世界観光学生サミット」は締めくくられた。

### APU開学5周年記念「アジア国際英語教育シンポジウム」にて 明石康・元国連事務次長が基調講演

APUでは開学5周年記念事業の一環として11月26・27日の両日「アジア国際英語教育シンポジウム」を開催した。韓国、中国、台湾、ベトナム、タイなど、英語を母語としない各国でどのような英語教育が行われているのか、来るアジア太平洋の時代にふさわしい英語教育はどのようなものか、情報と意見の交換を行うとともに、日本における英語教育改革の方向性について議論を深めた。

基調講演は明石康・元国連事務次長。自身の豊富な体験をもとに、日本人がこれからの国際舞台で競争していくには英語の修得が必須になっていることを強調。参加者に深い感銘を与えた。